

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 2 0 0 3 年 7 月 2 3 日
Date of Application:

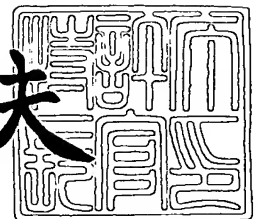
出 願 番 号 特 願 2 0 0 3 - 2 0 0 7 3 3
Application Number:
[ST. 10/C]: [J P 2 0 0 3 - 2 0 0 7 3 3]

出 願 人 トヨタ自動車株式会社
Applicant(s):

2 0 0 3 年 8 月 1 1 日

特 庁 長 官
Commissioner,
Japan Patent Office

今 井 康 夫



出証番号 出証特 2 0 0 3 - 3 0 6 4 4 9 1

【書類名】 特許願

【整理番号】 PY20031447

【提出日】 平成15年 7月23日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 F02M 25/08
F02D 41/14

【発明者】

【住所又は居所】 愛知県豊田市トヨタ町1番地 トヨタ自動車 株式会社
内

【氏名】 光谷 典丈

【特許出願人】

【識別番号】 000003207

【氏名又は名称】 トヨタ自動車 株式会社

【代理人】

【識別番号】 100068755

【弁理士】

【氏名又は名称】 恩田 博宣

【選任した代理人】

【識別番号】 100105957

【弁理士】

【氏名又は名称】 恩田 誠

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2002-217078

【出願日】 平成14年 7月25日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 002956

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1
【物件名】 要約書 1
【包括委任状番号】 9710232
【包括委任状番号】 0101646
【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 内燃機関の制御装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 燃料タンク内で発生する燃料ベーパーを一時的に捕集するキャニスタと、その捕集した燃料ベーパーを含むパージガスを内燃機関の吸気通路に発生する吸気負圧に基づいてパージするパージ手段と、目標空燃比に対する空燃比のずれ量に基づいてベーパー濃度を算出するベーパー濃度学習手段と、該ベーパー濃度学習手段により算出されたベーパー濃度に基づいて空燃比が目標空燃比となるように燃料噴射量を設定する噴射量設定手段と、を備えた内燃機関の制御装置において、

前記ベーパー濃度学習手段は、前記内燃機関の負荷が大きいときには負荷が小さいときに比較して前記ベーパー濃度学習値の更新量を小さくすることを特徴とする内燃機関の制御装置。

【請求項 2】 請求項 1 に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷が大きい状態は前記吸気通路に発生する吸気負圧が小さい状態であることを特徴とする内燃機関の制御装置。

【請求項 3】 請求項 1 に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷は、前記内燃機関に吸入される吸入空気量であることを特徴とする内燃機関の制御装置。

【請求項 4】 請求項 1 に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷は、前記内燃機関の吸気圧力であることを特徴とする内燃機関の制御装置。

【請求項 5】 請求項 1 ～ 4 のいずれかに記載の内燃機関の制御装置において、前記ベーパー濃度学習手段は、さらに、前記パージ手段によってパージされるパージ流量のパージ率が小さいときにはパージ率が大きいときに比較して前記ベーパー濃度学習値の更新量を小さくすることを特徴とする内燃機関の制御装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】**【発明の属する技術分野】**

本発明は、燃料タンク内で発生する燃料ベーパーを大気中に放出することなくキャニスタに捕集し、その捕集した燃料ベーパーを内燃機関の吸気通路へ適宜にパージするようにした燃料ベーパー処理装置を備えた内燃機関の制御装置に関する。

【0002】**【従来の技術】**

一般に、揮発性液体燃料を用いて駆動される内燃機関は、燃料ベーパー処理装置を備えている。その燃料ベーパー処理装置は、燃料タンクで発生する燃料蒸気（以下燃料ベーパーという）を一時的に蓄えるキャニスタを備えている。キャニスタ内の吸着剤に捕集された燃料ベーパーは適宜、そのキャニスタからパージ通路及びパージ制御弁を通じてエンジンの吸気通路へとパージされ、エンジンに吸入された空気に混入される。そして、燃料ベーパーは、インジェクタから噴射された燃料とともに、内燃機関の燃焼室内で燃焼される。パージ通路に設けられたパージ制御弁は、吸気通路へパージされる燃料ベーパーを含むガス（パージガス）の流量を調整する。

【0003】

一方、上記内燃機関では、その燃焼室に供給される可燃混合気の空燃比が検出され、その検出された実際の空燃比が目標空燃比に合致するように、インジェクタから噴射される燃料の量が調節される。空燃比制御を好適に行うためには、パージ通路を介して吸気通路へパージされる燃料ベーパーの量を考慮して、インジェクタから燃焼室に噴射される燃料の量を制御することが必要になる。

【0004】

このように構成された内燃機関において、燃料ベーパーの影響を加味した燃料噴射量の制御は、以下のようにして実施される。

まず、機関回転速度や吸入空気量等の運転状態パラメータに基づいて基本となる燃料噴射量（時間）が算出され、その基本燃料噴射量に、空燃比フィードバック補正係数、空燃比学習値、パージ空燃比補正係数、及びその他の各種運転状態に基づく補正係数を加味した最終燃料噴射量（時間）が決定される。空燃比フィ

ードバック補正係数は、前回の燃料噴射に係る空燃比の理論空燃比に対するずれ量に対応するものであり、今回の燃料噴射に係る空燃比を理論空燃比により近似させるための補正係数である。空燃比学習値は、異なる運転領域における空燃比フィードバック制御の制御結果に基づき各運転領域ごとに学習記憶された補正係数であり、この学習値を採用することにより空燃比フィードバック制御の精度が一層高められることになる。

【0005】

一方、パージ空燃比補正係数は、燃料ベーパーの燃焼室への導入による空燃比への影響を加味した補正係数であり、パージ率とベーパー濃度学習値とに基づいて算出される。ここで、パージ率とは、吸気通路内を流れる吸入空気の流量に対する同吸気通路内に導入されるパージガスの流量の割合を反映する係数である。また、ベーパー濃度学習値とは前記パージガス中のベーパー成分の濃度を反映する係数である。これら両係数を乗算したものをパージ空燃比補正係数として、空燃比の補正に用いることとなる。

【0006】

このように構成された内燃機関では、燃料ベーパーがパージされているときに空燃比が目標空燃比からずれたときには、パージ空燃比補正係数を算出するためのベーパー濃度学習値の更新が行われる。この際、ベーパー濃度学習値が上記パージ率に関係なく予め定められた一定量だけ更新されると、特にパージ率が小さい状態から大きい状態になったときに空燃比が目標空燃比からずれてしまうという問題がある。

【0007】

すなわち、内燃機関の空燃比はパージ作用の影響のみによって変動するわけではなく、車両の走行状態の変化によっても変動する。従って空燃比のずれが全てパージ作用の影響によるものとして空燃比のずれ量を全てベーパー濃度学習値の更新量に反映させると、算出されたベーパー濃度学習値は実際のベーパー濃度に対してずれを生じることになる。このように算出されたベーパー濃度学習値が実際のベーパー濃度に対してずれると、パージ率が変化しないとき及びパージ率が小さくなるときには特に問題を生じないが、パージ率が小さな値から大きくなる時に問題

を生ずる。

【0008】

例えば今、パージ作用の影響ではなく車両の走行状態の変化によって空燃比が目標空燃比に対し2%ずれており、パージ率が小さな値、例えば0.5%だったとする。このとき空燃比のずれが全てパージ作用の影響によるものとして空燃比のずれ量が全てベーパー濃度学習値の更新量に反映されると、算出されたベーパー濃度学習値は実際のベーパー濃度に対し単位パージ率当り4% ($= 2\% / 0.5\%$) のずれを生じていることになる。この場合、パージ率が0.5%に維持されていると算出されたベーパー濃度学習値は実際のベーパー濃度に対して4%ずれ続けることになる。

【0009】

ところがパージ率が例えばパージ率が0.5%から5%まで上昇したとすると、算出されたベーパー濃度学習値のずれ量は20% ($= \text{単位パージ率当りのずれ量 } 4\% \times \text{パージ率 } 5\%$) となる。算出されたベーパー濃度学習値のずれ量が20%にもなると、この算出されたベーパー濃度学習値に基いて補正された燃料供給量は目標空燃比に維持するのに必要な燃料供給量に比べて大幅にずれ、これによって空燃比が目標空燃比に対して大幅にずれるという問題を生ずる。

【0010】

一方、車両の走行状態の影響によって空燃比が目標空燃比に対し2%ずれており、パージ率が大きな値、例えば5%だったとすると、このとき算出されたベーパー濃度学習値は単位パージ率当り0.4% ($= 2 / 5\%$) にすぎない。従ってこのときにはベーパー濃度学習値の誤差は小さく、特に問題とはならない。また、このようにパージ率が大きな値から低下したときにはベーパー濃度学習値のずれ量が次第に小さくなるので、この場合にも特に問題とはならない。すなわち、問題を生ずるのはパージ率が低いときにベーパー濃度学習値を更新するときである。

【0011】

このような問題点を解決するため、例えば特許文献1では、ベーパー濃度学習値を更新する際、パージ率が小さいときにはパージ率が大きいときに比べてベーパー濃度学習値の更新量を小さな値に設定するようにしている。これにより、車両の

走行状態の影響による空燃比のずれによるベーパー濃度の誤学習を防止することができるようにしている。

【0012】

【特許文献1】

特開平10-227242号公報

【0013】

【発明が解決しようとする課題】

ところが、上記特許文献1に記載された技術のように、パージ率は吸気通路内を流れる吸入空気の流量に対するパージ流量の理論的な割合であって、このパージ率が小さい値であることは吸入空気量に対してパージ流量が少ない状態である。しかもこのようにパージ率が小さい値である場合には吸気通路に作用する吸気負圧も小さい。パージ流量は吸気通路に作用する吸気負圧の大きさによってその流量がばらつく。また、内燃機関毎に吸気負圧に対する圧損ばらつきがあるため、吸気負圧が小さい値となるパージ率が小さい状態においては、内燃機関毎にパージ流量がばらつくこととなる。従って、上記公報のように、パージ率が小さい値であるときに単にベーパー濃度学習値の更新量を小さな値に設定するものでは、パージ流量のばらつきが考慮されていないため、ベーパー濃度の誤学習のおそれがある。よって、パージ率が小さいときには燃料ベーパーの濃度が正確に求められず、燃料噴射量の算出が不正確となり、空燃比制御の精度が低下するという問題がある。

【0014】

本発明は、こうした実情に鑑みてなされたものであって、その目的は、内燃機関の負荷の大きさによるパージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、空燃比制御の精度を向上させることができる内燃機関の制御装置を提供することにある。

【0015】

【課題を解決するための手段】

以下、上記目的を達成するための手段及びその作用効果について記載する。

請求項1に記載の発明は、燃料タンク内で発生する燃料ベーパーを一時的に捕集

するキャニスタと、その捕集した燃料ベーパーを含むパージガスを内燃機関の吸気通路に発生する吸気負圧に基づいてパージするパージ手段と、目標空燃比に対する空燃比のずれ量に基づいてベーパー濃度を算出するベーパー濃度学習手段と、該ベーパー濃度学習手段により算出されたベーパー濃度に基づいて空燃比が目標空燃比となるように燃料噴射量を設定する噴射量設定手段と、を備えた内燃機関の制御装置において、前記ベーパー濃度学習手段は、前記内燃機関の負荷が大きいときには負荷が小さいときに比較して前記ベーパー濃度学習値の更新量を小さくすることを特徴とする。

【0016】

燃料ベーパーのパージを実行しているときに、空燃比が目標空燃比からずれたときには、ベーパー濃度学習値が更新される。この際、内燃機関の負荷が大きいときには吸気通路に発生する吸気負圧も小さく、内燃機関毎に吸気負圧に対する圧損ばらつきがあるため、パージ流量がばらつくこととなる。

【0017】

この点に関して、上記構成によれば、内燃機関の負荷が大きいときには負荷が小さいときに比較してベーパー濃度学習値の更新量が小さくされるため、パージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、空燃比制御の精度が向上する。

【0018】

請求項2に記載の発明は、請求項1に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷が大きい状態は前記吸気通路に発生する吸気負圧が小さい状態であることを特徴とする。

【0019】

請求項3に記載の発明は、請求項1に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷は、前記内燃機関に吸入される吸入空気量であることを特徴とする。

内燃機関に吸入される吸入空気量が大きい状態では吸気通路に発生する吸気負圧も小さく、内燃機関毎に吸気負圧に対する圧損ばらつきがあるため、パージ流量がばらつくこととなる。

【0020】

この点に関して、上記構成によれば、内燃機関の吸入空気量が大きいときには吸入空気量が小さいときに比較してベーパー濃度学習値の更新量が小さくされるため、パージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、空燃比制御の精度が向上する。

【0021】

請求項4に記載の発明は、請求項1に記載の内燃機関の制御装置において、前記負荷は、前記内燃機関の吸気圧力であることを特徴とする。

内燃機関の吸気圧力が大きい状態では吸気通路に発生する吸気負圧が小さく、内燃機関毎に吸気負圧に対する圧損ばらつきがあるため、パージ流量がばらつくこととなる。

【0022】

この点に関して、上記構成によれば、内燃機関の吸気圧力が大きいときには吸気圧力が小さいときに比較してベーパー濃度学習値の更新量が小さくされるため、パージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、空燃比制御の精度が向上する。

【0023】

請求項5に記載の発明は、請求項1～4のいずれかに記載の内燃機関の制御装置において、前記ベーパー濃度学習手段は、さらに、前記パージ手段によってパージされるパージ流量のパージ率が小さいときにはパージ率が大きいときに比較して前記ベーパー濃度学習値の更新量を小さくすることを特徴とする。

【0024】

パージ率が小さいとき、すなわちパージ流量が小さいときに学習したベーパー濃度学習値にずれがあると、パージ率が変化して大きくなったときにベーパー濃度学習値が大幅にずれ、空燃比が目標空燃比から大幅にずれることになる。

【0025】

この点に関して、上記構成によれば、パージ率が小さいときにはパージ率が大きいときに比べてベーパー濃度学習値の更新量を小さな値に設定するようにしているため、ベーパー濃度の誤学習を抑制することができるようになる。

【0026】

【発明の実施の形態】

以下、本発明に係る内燃機関の制御装置を具体化した実施の形態を図面を参照して説明する。

【0027】

図1は、本実施の形態に係る燃料ベーパー処理装置を備えた自動車のエンジンシステムを示す概略構成図である。同システムは燃料を収容するための燃料タンク1を備える。

【0028】

燃料タンク1に内蔵されるポンプ4から延びるメインライン5はデリバリパイプ6に接続される。このデリバリパイプ6に設けられた複数のインジェクタ7はエンジン8に設けられた複数の気筒（図示略）に対応して配置される。デリバリパイプ6から延びるリターンライン9は燃料タンク1に接続される。ポンプ4から吐出された燃料はメインライン5を通過してデリバリパイプ6に至り、各インジェクタ7へと分配される。各インジェクタ7は電子制御装置（ECU）31による制御のもとにエンジン8の各気筒へ燃料を噴射供給する。

【0029】

吸気通路10はエアクリーナ11及びサージタンク10aを含む。エアクリーナ11を通過して浄化された空気は吸気通路10に導入される。各インジェクタ7から噴射された燃料とこの導入される空気との混合気はエンジン8の各気筒に供給され、燃焼に供される。デリバリパイプ6において各インジェクタ7へ分配されることなく余った燃料は、上記リターンライン9を通過して燃料タンク1に戻される。燃焼後の排気ガスはエンジン8の各気筒から排気通路12を通過して外部へ排出される。

【0030】

燃料ベーパー処理装置は燃料タンク1で発生する燃料ベーパーを大気中に放出させることなく捕集して処理する。この処理装置は燃料タンク1で発生するベーパーをベーパーライン13を通じて捕集するキャニスタ14を有する。キャニスタ14の中は活性炭等の吸着剤15により占められる部分と、その吸着剤15の上下に位置する空間14a、14bとを含む。

【0031】

キャニスタ 14 に設けられた第 1 大気弁 16 は逆止弁よりなる。この大気弁 16 は、キャニスタ 14 の内圧が大気圧よりも小さいときに開いてキャニスタ 14 に対する外気（大気圧）の導入を許容し、その逆方向の気体の流れを阻止する。この大気弁 16 から延びるエアパイプ 17 はエアクリーナ 11 に接続される。従って、キャニスタ 14 にはエアクリーナ 11 により浄化された外気が導入される。キャニスタ 14 の内部に設けられた第 2 大気弁 18 も逆止弁よりなる。この大気弁 18 はキャニスタ 14 の内圧が大気圧よりも大きくなったときに開いてキャニスタ 14 からアウトレットパイプ 19 に対する気体（内圧）の導出を許容し、その逆方向の気体の流れを阻止する。

【0032】

キャニスタ 14 に設けられたベーパー制御弁 20 は燃料タンク 1 からキャニスタ 14 へ流れるベーパーを制御する。この制御弁 20 は前記ベーパーライン 13 を含む燃料タンク 1 の側の内圧（以下タンク側内圧という）と、キャニスタ 14 の側の内圧（以下キャニスタ側内圧という）との差に基づいて開かれることにより、キャニスタ 14 に対するベーパーの流入を許容する。

【0033】

キャニスタ 14 から延びるパージライン 21 はサージタンク 10 a に連通している。キャニスタ 14 はベーパーライン 13 を通じて導入される気体中の燃料成分だけを吸着剤 15 に吸着させて捕集し、燃料成分を含まない気体だけを大気弁 18 が開いたときにアウトレットパイプ 19 を通じて外部へ排出する。エンジン 8 の運転時には、吸気通路 10 で発生する吸気負圧がパージライン 21 に作用する。この状態で、パージライン 21 に設けられたパージ制御弁 22 が開弁されると、キャニスタ 14 に捕集された燃料ベーパー、及び燃料タンク 1 からキャニスタ 14 に導入されて吸着剤 15 に吸着されることのない燃料ベーパーが、そのパージライン 21 を通じて吸気通路 10 へパージされる。パージ制御弁 22 は電気信号の供給を受けて弁体を移動させる電磁弁であり、その開度が ECU 31 によってデューティ制御されることにより、パージライン 21 を通過するベーパーを含むパージガスの流量をエンジン 8 の運転状態に応じて調整する。

【0034】

各種センサ 25～30 は、エンジン 8 の運転状態を検出する。吸気通路 10 内のスロットル 25 a 近傍に設けられたスロットルセンサ 25 は、アクセルペダルの踏み量に対応したスロットル開度 TA を検出し、その開度 TA に応じた信号を出力する。エアクリーナ 11 の近傍に設けられた吸気温度センサ 26 は吸気通路 10 に吸入される空気の温度（吸気温度） THA を検出し、その温度 THA に応じた信号を出力する。同エアクリーナ 11 の近傍に設けられた吸気量センサ 27 は吸気通路 10 に吸入される空気量（吸気量） Q を検出し、その吸気量 Q に応じた信号を出力する。エンジン 8 に設けられた水温センサ 28 はエンジンブロック 8 a の内部を流れる冷却水の温度（冷却水温） THW を検出し、その温度 THW に応じた信号を出力する。エンジン 8 に設けられたクランク角センサ（回転速度センサ）29 はエンジン 8 のクランクシャフト 8 b の回転速度（エンジン回転数） NE を検出し、その回転速度 NE に応じた信号を出力する。排気通路 12 に設けられた酸素センサ 30 は排気通路 12 を通過する排気ガス中の酸素濃度を検出し、その濃度の高さに応じた信号を出力する。

【0035】

ECU 31 は、これら各種センサ 25～30 から出力される信号を入力する。また、同 ECU 31 は、エンジン 8 における混合気の空燃比がエンジン 8 の運転状態に適した目標空燃比となるように、各インジェクタ 7 から噴射される燃料量を制御するための空燃比制御を実行する。

【0036】

さらに、ECU 31 はエンジン 8 の運転状態に適したパージ流量に制御すべく、パージ制御弁 22 の開閉制御を行う。すなわち、上記各種センサの信号からエンジン 8 運転状態を判断し、更にその判断に基づいて、パージ制御弁 22 の開閉をデューティ制御する。ここで、キャニスタ 14 から吸気通路 10 へパージされるベーパーはエンジン 8 における混合気の空燃比に影響をおよぼす。そのため、ECU 31 はエンジン 8 の運転状態に応じてパージ制御弁 22 の開度を決定する。

【0037】

加えて、ECU 31 はパージ処理が実行されているときに、空燃比制御の制御

結果と、酸素センサ 30 により検出される酸素濃度値に基づき、パージガス中の燃料ベーパーの濃度（以下、ベーパー濃度）を学習する。前述のように、空燃比が小さくなった場合（リッチ）、エンジン 8 の排気ガス中に含まれる CO 等の濃度が増加し、酸素濃度が減少する。そこで、ECU 31 は、酸素センサ 30 により検出される排気ガス中の酸素濃度の値に基づき、ベーパー濃度値 FGP G を学習する。言い換えれば、ECU 31 は、目標空燃比に対する検出空燃比のずれに基づき、ベーパー濃度値 FGP G を求める。ECU 31 は、このベーパー濃度値 FGP G に基づきパージ制御弁 22 の開度に相当するデューティ比 DPG の値を決定し、その値に応じた駆動パルス信号を制御弁 22 に出力する。

【0038】

また ECU 31 は、基本的にはエンジン 8 の運転状態に応じて予め設定されている基本燃料噴射量（時間）TP を、前記ベーパー濃度値 FGP G や、空燃比フィードバック制御により算出される空燃比フィードバック補正係数 FAF 等を加味して補正し、最終的な目標燃料噴射量（時間）TAU を決定する。

【0039】

図 2 のブロック図に示すように、ECU 31 は中央処理装置（CPU）32、読み出し専用メモリ（ROM）33、ランダムアクセスメモリ（RAM）34、バックアップ RAM 35 及びタイマカウンタ 36 等を備える。ECU 31 はこれら各部 32～36 と、外部入力回路 37 と、外部出力回路 38 等とをバス 39 により接続してなる論理演算回路を構成する。ここで、ROM 33 は空燃比制御及びパージ制御等に関する所定の制御プログラム等を予め記憶する。RAM 34 は CPU 32 の演算結果等を一時記憶する。バックアップ RAM 35 はバッテリバックアップされた不揮発性の RAM であり、書き込まれたデータを ECU 31 の非能動時（電源オフ時）においても保存する。タイマカウンタ 36 は同時に複数の計時動作を行うことができる。外部入力回路 37 はバッファ、波形成形回路、ハードフィルタ（電気抵抗及びコンデンサよりなる回路）及び A/D 変換器等を含む。外部出力回路 38 は駆動回路等を含む。各種センサ 25～30 は外部入力回路 37 につながる。上記インジェクタ 7 やパージ制御弁 22 等は外部出力回路 38 につながる。

【0040】

CPU32は外部入力回路37を介して入力される各種センサ25～30の検出信号を読み込む。CPU32はそれら入力値に基づき空燃比フィードバック制御、空燃比学習、パージ制御、ベーパー濃度学習、及び燃料噴射制御等を実行する。

【0041】

図3は前記ECU31にて実行される内燃機関の空燃比制御手順のメインルーチンを示すフローチャートである。ECU31は、予め決定された周期毎にメインルーチンを実行する。メインルーチンの実行を開始すると、まずステップ100にて、空燃比制御の基礎となる補正係数であるフィードバック補正係数FAFを算出する。続くステップ102において、ECU31は、空燃比を学習する。次に、ステップ104において、ECU31は、ベーパー濃度の学習及び燃料噴射時間の算出を行う。

【0042】

以下に、図3のステップ100、102、104の各々で実行される処理内容を詳細に説明する。先ず、図4は、図3のステップ100で実行されるフィードバック補正係数FAF算出ルーチンを示すフローチャートである。図4に示すように、まず初めにステップ110において空燃比のフィードバック制御条件が成立しているかどうか判别される。フィードバック制御条件が成立していないときにはステップ136に進んでフィードバック補正係数FAFが1.0に固定され、次いでステップ138においてフィードバック補正係数FAFの平均値FAFV（後述する）が1.0に固定される。次いでステップ134に進む。

【0043】

これに対してステップ110においてフィードバック制御条件が成立しているときにはステップ112に進む。

ステップ112では酸素センサ30の出力電圧Vが0.45（V）以上かどうか、すなわち混合気の空燃比が目標空燃比（例えば理論空燃比）以下であるか否かが判别される。なお、これ以降、空燃比が目標空燃比より低いことを、単に混合気がリッチであると言う。また、空燃比が目標空燃比より高いことを、単に混

混合気がリーンであると言う。出力電圧 $V \geq 0.45$ (V) のとき、即ち混合気がリッチのときにはステップ 114 に進んで前回の処理サイクル時に混合気がリーンであったかどうか判別される。前回の処理サイクル時に混合気がリーンのとき、即ちリーンからリッチに変化したときにはステップ 116 に進んで、現在のフィードバック補正係数 F_{AF} が F_{AFL} として保持され、ステップ 118 に進む。ステップ 118 では現在のフィードバック補正係数 F_{AF} から予め定められたスキップ値 S を減算した結果が、新たなフィードバック補正係数 F_{AF} として設定される。従って、フィードバック補正係数 F_{AF} はスキップ値 S だけ急激に減少する。

【0044】

一方、ステップ 112 において出力電圧 $V < 0.45$ (V) であると判断されたとき、即ち混合気がリーンのときにはステップ 126 に進んで前回の処理サイクル時に混合気がリッチであったかどうか判別される。前回の処理サイクル時に混合気がリッチのとき、即ちリッチからリーンに変化したときにはステップ 128 に進んで、現在のフィードバック補正係数 F_{AF} が F_{AFR} として保持され、ステップ 130 に進む。ステップ 130 では現在のフィードバック補正係数 F_{AF} に前記スキップ値 S を加算した結果が、新たなフィードバック補正係数 F_{AF} として設定される。従って、フィードバック補正係数 F_{AF} はスキップ値 S だけ急激に増大する。

【0045】

前記ステップ 118 或いはステップ 130 からステップ 120 に進むと、現在保持されている F_{AFL} と F_{AFR} との合計を 2 で割った結果が、前記平均値 F_{AFAV} として設定される。つまり、平均値 F_{AFAV} は、変動するフィードバック補正係数 F_{AF} の平均値を示す。次いでステップ 122 ではスキップフラグがセットされる。次いでステップ 134 に進む。

【0046】

一方、ステップ 114 において前回の処理サイクル時には混合気がリッチであったと判別されたときはステップ 124 に進んで、現在のフィードバック補正係数 F_{AF} から積分値 K ($K \ll S$) が減算され、次いでステップ 134 に進む。従

って、フィードバック補正係数 $F A F$ は徐々に減少する。また、ステップ 126 において前回の処理サイクル時にはリーンであったと判別されたときはステップ 132 に進んで、現在のフィードバック補正係数 $F A F$ に積分値 K ($K \ll S$) が加算され、次いでステップ 134 に進む。従って、フィードバック補正係数 $F A F$ は徐々に増大する。

【0047】

ステップ 134 ではフィードバック補正係数 $F A F$ が上限値 1.2 と下限値 0.8 との間の値に制御される。即ち、フィードバック補正係数 $F A F$ が 1.2 と 0.8 との間の値であれば、フィードバック補正係数 $F A F$ の値がそのまま採用される。しかし、フィードバック補正係数 $F A F$ が 1.2 よりも大きい場合には 1.2 に設定され、0.8 よりも小さい場合には 0.8 に設定されるステップ 134 が終了すると、フィードバック補正係数 $F A F$ 算出ルーチンを終了する。

【0048】

なお、図 5 は空燃比が目標空燃比に維持されているときの酸素センサ 30 の出力電圧 V とフィードバック補正係数 $F A F$ との関係を示すグラフである。図 5 に示されるように酸素センサ 30 の出力電圧 V が基準電圧、例えば 0.45 (V) よりも低い値から基準電圧よりも高い値に変化すると、即ち混合気がリーンからリッチに変化すると、フィードバック補正係数 $F A F$ はスキップ値 S だけ急激に低下され、次いで積分値 K でもって徐々に減少される。これに対して酸素センサ 30 の出力電圧 V が基準電圧よりも高い値から低い値に変化すると、即ち混合気がリッチからリーンに変化すると、フィードバック補正係数 $F A F$ はスキップ値 S だけ急激に増大され、次いで積分値 K でもって徐々に増大される。

【0049】

燃料噴射量は、フィードバック補正係数 $F A F$ が小さくなると減少し、フィードバック補正係数 $F A F$ が大きくなると増大する。混合気がリッチになるとフィードバック補正係数 $F A F$ が減少されるので、燃料噴射量が減少される。混合気がリーンになるとフィードバック補正係数 $F A F$ が増大されるために燃料噴射量が増大される。その結果、空燃比は目標空燃比（理論空燃比）に制御されることになる。図 5 に示されるように、フィードバック補正係数 $F A F$ は基準値、即ち

1. 0を中心として変動する。

【0050】

また、図5においてFAFLは混合気がリーンからリッチになったときのフィードバック補正係数FAFの値を示しており、FAFRは混合気がリッチからリーンになったときのフィードバック補正係数FAFの値を示している。

【0051】

図6は、図3のステップ102で実行される空燃比学習ルーチンを示すフローチャートである。図6に示すように、まず初めにステップ150において空燃比の学習条件が成立しているかどうか判别される。空燃比の学習条件が成立していないときにはステップ166にジャンプし、空燃比の学習条件が成立しているときにはステップ152に進む。ステップ152ではスキップフラグ（図4のステップ122参照）がセットされているかどうか判别され、スキップフラグがセットされていないときにはステップ166にジャンプする。これに対してスキップフラグがセットされているときにはステップ154に進んでスキップフラグがリセットされ、次いでステップ156に進む。即ち、図5のステップ118でフィードバック補正係数FAFからスキップ値Sが減算された場合、或いは図5ステップ130でフィードバック補正係数FAFにスキップ値Sが加算された場合には、ステップ156に進むことになる。以下、フィードバック補正係数FAFがスキップ値S分だけ急変することを、フィードバック補正係数FAFがスキップされると言う。

【0052】

ステップ156ではパージ率PGRが零であるかどうか、即ち燃料ベーパーのパージが行われているかどうか（パージ制御弁22が開いているか否か）が判别される。パージ率PGRとは、吸気通路10内を流れる吸入空気の流量に対するパージガスの流量をいう。パージ率PGRが零でないとき、即ちパージが行われているときには、図8に示されるベーパー濃度の学習ルーチンへ進む。これに対してパージ率PGRが零のとき、即ちパージが行われていないときにはステップ158に進んで空燃比の学習が行われる。

【0053】

即ち、まず初めにステップ158においてフィードバック補正係数の平均値 $F A F A V$ が 1.02 以上であるかどうか判别される。平均値 $F A F A V \geq 1.02$ のときにはステップ164に進んで空燃比の学習値 $K G_j$ に一定値 X が加算される。なお、ECU31のRAM34には、異なる複数の機関負荷領域にそれぞれ対応して、複数の学習領域 j が予め定められており、各学習領域 j に対してそれぞれ空燃比の学習値 $K G_j$ が格納される。従ってステップ164では、現在の機関負荷に対応する学習領域 j 内の学習値 $K G_j$ が更新される。次いでステップ166に進む。

【0054】

一方、ステップ158においてフィードバック補正係数の平均値 $F A F A V < 1.02$ であると判别されたときにはステップ160に進んで平均値 $F A F A V$ が 0.98 以下であるかどうか判别される。平均値 $F A F A V \leq 0.98$ のときにはステップ162に進んで機関負荷に対応する学習領域 j 内の学習値 $K G_j$ から一定値 X が減算される。一方、ステップ160において $F A F A V > 0.98$ であると判别されたとき、即ち平均値 $F A F A V$ が 0.98 と 1.02 との間にあるときには空燃比の学習値 $K G_j$ を更新することなくステップ166にジャンプする。

【0055】

ステップ166では機関始動中であるかどうか判别され、機関始動中のときにはステップ168に進んで、初期化処理が実行される、具体的にはベーパー濃度値 $F G P G$ が零とされ、パージ実行時間カウンタ値 $C P G R$ がクリアされる。次いで図9に示される燃料噴射時間の算出ルーチンに進む。一方、始動時でない場合には図9に示される燃料噴射時間の算出ルーチンに直接進む。

【0056】

図8は図3のステップ104で実行されるベーパー濃度学習ルーチンを示すフローチャートであり、図9は同じく図3のステップ104で実行される燃料噴射時間算出ルーチンを示すフローチャートである。

【0057】

図8のベーパー濃度学習ルーチンを説明する前に、図7のグラフを参照してベ-

パ濃度学習の考え方について説明する。ベーパー濃度の学習はベーパー濃度を正確に求めることから始まる。ベーパー濃度値 F_{GPG} の学習の過程が、図 7 に示されている。

【0058】

パージ空燃比補正係数（以下、パージ A/F 補正係数と記載する） F_{PG} は燃焼室に導入される燃料ベーパーの量を反映する係数であり、ベーパー濃度値 F_{GPG} にパージ率 PGR を乗算することによって得られる。ベーパー濃度値 F_{GPG} は、フィードバック補正係数 F_{AF} がスキップ値 S 分だけ変化する毎に（図 4 のステップ 118, 130 参照）、次式（1）、（2）に基づいて算出される。

【0059】

【数 1】

$$t_{FG} \leftarrow \{ (1 - F_{AFAV}) / PGR \} \times K_{RPG} \quad \cdots (1)$$

$$F_{GPG} \leftarrow F_{GPG} + t_{FG} \quad \cdots (2)$$

値 F_{AFAV} は、図 4 のステップ 120 で説明したように、フィードバック補正係数 F_{AF} の平均値を示している。値 K_{RPG} は、更新量補正係数であり、更新量補正係数 K_{RPG} は図 14 に示されるように、パージ率 PGR 及び負荷率 $LOAD$ によるマップに基づいて算出される。この更新量補正係数 K_{RPG} のマップは予め ROM33 内に記憶されている。なお、負荷率 $LOAD$ は、エンジン 8 への最大吸入空気量に対するその運転状態における吸入空気量の割合である。負荷率 $LOAD$ が大きい状態は吸気圧力が大きい状態であり、吸気負圧は小さくなる。逆に、負荷率 $LOAD$ が小さい状態は吸気圧力が小さい状態であり、吸気負圧は大きくなる。この更新量補正係数 K_{RPG} は、負荷率 $LOAD$ が大きい値、すなわち吸気負圧が小さい値であるほど小さい値が採用され、負荷率 $LOAD$ が小さい値、すなわち吸気負圧が大きい値であるほど 1.0 に近づくような大きい値が採用される。また、更新量補正係数 K_{RPG} は、パージ率 PGR が大きい値であるほど大きい値が採用され、パージ率 PGR が小さい値であるほど小さい値が採用される。

【0060】

すなわち、パージ率 PGR は吸気通路 10 内を流れる吸入空気量に対するパー

ジ流量の理論的な割合であって、このパーシ率 PGR が小さい値であることは吸入空気量に対してパーシ流量が少ない状態である。しかもこのようにパーシ率が小さい値である場合には吸気通路 10 に作用する吸気負圧も小さい。図 15 に示されるように、負荷率 $KLOAD$ が大きい、すなわち吸気負圧が小さいほど、パーシ制御弁 22 における圧損のばらつきが大きくなり、パーシ制御弁 22 を全開としたときのパーシ流量 KPQ のばらつきが大きくなる。また、エンジン 8 毎に吸気負圧に対するパーシ制御弁 22 の圧損ばらつきがあるため、吸気負圧が小さい値となるパーシ率が小さい状態においては、エンジン 8 毎にパーシ制御弁 22 を介してパーシされるパーシ流量がばらつくこととなる。従って、パーシ率 PGR が小さい値であるときに単にベーパー濃度学習値 $FGPG$ の更新量を小さな値に設定していたのでは、パーシ流量のばらつきが考慮されておらず、ベーパー濃度の誤学習のおそれがある。そのため、本実施形態では更新量補正係数 $KRPG$ は図 14 に示されるように、パーシ率 PGR 及び負荷率 $KLOAD$ によるマップに基づいて算出される。

【0061】

そして、この平均値 $FAFV$ 、パーシ率 PGR 及び更新量補正係数 $KRPG$ に基づき、ベーパー濃度値 $FGPG$ の更新量 tFG が求められる。そして、フィードバック補正係数 FAF がスキップ値 S 分だけ変化する毎に、求められた更新量 tFG がベーパー濃度値 $FGPG$ に加算される。

【0062】

図 7 に示すように、パーシが開始されると混合気がリッチとなるために、空燃比を理論空燃比とすべくフィードバック補正係数 FAF が小さくなる。時刻 $t1$ において、酸素センサ 30 の検出結果に基づき混合気がリッチからリーンに切替ったと判断されると、フィードバック補正係数 FAF は増大される。パーシが開始されてから時刻 $t1$ に至るまでのフィードバック補正係数 FAF の変化量 ΔFAF は、パーシによる空燃比の変動量を表しており、この変化量 ΔFAF は時刻 $t1$ におけるベーパー濃度を表わしている。

【0063】

時刻 $t1$ に達すると空燃比は理論空燃比に維持される。その後、空燃比が理論

空燃比に維持された状態でフィードバック補正係数 $F A F$ の平均値 $F A F A V$ を 1.0 まで戻すべく、ベーパー濃度値 $F G P G$ が、フィードバック補正係数 $F A F$ がスキップ値 S 分だけ変化する毎に徐々に更新される。ベーパー濃度値 $F G P G$ の一回当たりの更新量 $t F G$ は、前記の式 (1) に示されるように、 $\{ (1 - F A F A V) / P G R \} \times K R P G$ で表される。

【0064】

図 7 に示されるように、ベーパー濃度値 $F G P G$ の更新が数回繰返されると、フィードバック補正係数 $F A F$ の平均値 $F A F A V$ は 1.0 に戻り、その後はベーパー濃度値 $F G P G$ は一定となる。ベーパー濃度値 $F G P G$ が一定になるということは、このベーパー濃度値 $F G P G$ が実際のベーパー濃度を正確に表わしていることを意味しており、言い換えればベーパー濃度の学習が完了したことを意味している。

【0065】

一方、燃焼室に導入される燃料ベーパー量は、単位パーシ率当りのベーパー濃度値 $F G P G$ にパーシ率 $P G R$ を乗算した値によって反映される。従って、燃料ベーパー量を反映するパーシ A / F 補正係数 $F P G (= F G P G \cdot P G R)$ は、図 7 に示されるようにベーパー濃度値 $F G P G$ が更新される毎に更新され、パーシ率 $P G R$ が増大するにつれて増大する。

【0066】

パーシ開始後におけるベーパー濃度の学習が一旦完了した後においても、ベーパー濃度が増加すればフィードバック補正係数 $F A F$ は 1.0 からずれる。このときにも、上記式 1 を用いて、ベーパー濃度値 $F G P G$ の更新量 $t F G$ が算出される。

【0067】

続いて、図 8 のベーパー濃度学習ルーチンについて説明する。図 8 のベーパー濃度学習ルーチンは、上述した図 6 のステップ 156 においてパーシが行われていると判断されたときに開始される。図 8 に示すように、まず初めにステップ 180 において、フィードバック補正係数 $F A F$ の平均値 $F A F A V$ が所定範囲内にあるかどうか、即ち $1.02 > F A F A V > 0.98$ であるかどうか判別される。 $1.02 > F A F A V > 0.98$ であるときにはステップ 186 に進んで更新量 $t F G$ が零とされ、次いでステップ 188 に進む。従ってこのときにはベーパー

濃度値 F_{GPG} は更新されない。

【0068】

一方、ステップ 180 において $F_{AFV} \geq 1.02$ であるか又は $F_{AFV} \leq 0.98$ であるときには、ステップ 182 に進んで、図 14 に示されるように、パーシ率 P_{GR} 及び負荷率 K_{LOAD} によるマップに基づいて更新量補正係数 K_{RPG} が算出される。

【0069】

次にステップ 184 に進んで、前記ステップ 182 にて求められた更新量補正係数 K_{RPG} を用いて上記式 (1) に基づき更新量 t_{FG} が算出される。次いでステップ 188 に進む。ステップ 188 ではベーパー濃度値 F_{GPG} に更新量 t_{FG} が加算される。次いでステップ 190 ではベーパー濃度値 F_{GPG} の更新回数を表している更新回数カウンタ C_{FGPG} が 1 だけインクリメントされる。次いで図 9 に示される燃料噴射時間の算出ルーチンに進む。

【0070】

次に、図 9 の燃料噴射時間算出ルーチンについて説明する。

まず初めにステップ 200 において機関負荷 Q/N 及び機関回転速度 N_E に基づき基本燃料噴射時間 T_P が算出される。なお、基本燃料噴射時間 T_P は、空燃比を目標空燃比とするのに必要な、実験により求められた噴射時間であって、この基本燃料噴射時間 T_P は機関負荷 Q/N (吸入空気量 Q / 機関回転速度 N_E) 及び機関回転速度 N_E の関数として予め ROM 33 内に記憶されている。

【0071】

次いでステップ 202 では暖機増量等のための補正係数 F_W が算出される。この補正係数 F_W は、例えば、エンジン 8 の暖機運転時或いは車両加速時において燃料噴射量を増量するために用いられる。この補正係数 F_W は、増量補正する必要がないときには 1.0 となる。

【0072】

次いでステップ 204 ではベーパー濃度値 F_{GPG} にパーシ率 P_{GR} を乗算することによってパーシ空燃比補正係数 F_{PG} が算出される。このパーシ A/F 補正係数 F_{PG} はエンジン 8 の運転が開始されてからパーシが開始されるまでの間は

ゼロとされ、パージの開始後は燃料ベーパーの濃度が高くなるほど大きくなる。なお、エンジン 8 の運転中においてパージが一時的に停止されたときは、パージの停止期間中、パージ A/F 補正係数 FPG はゼロとされる。

【0073】

次いでステップ 206 では次式 3 に基づいて燃料噴射時間 TAU が算出され、燃料噴射時間算出ルーチンを終了する。

【0074】

【数 2】

$$TAU \leftarrow TP \cdot FW \cdot (FAF + KG_j - FPG) \quad \cdots (3)$$

上述したように、フィードバック補正係数 FAF は酸素センサ 30 の出力信号に基づいて空燃比を目標空燃比に制御するためのものである。目標空燃比としてはどのような空燃比を用いてもよいが、本実施形態では目標空燃比が理論空燃比とされており、従って以下目標空燃比を理論空燃比とした場合について説明する。酸素センサ 30 は空燃比が過濃側のとき、即ち混合気がリッチのとき 0.9 (V) 程度の出力電圧を発生し、空燃比が希薄側のとき、即ち混合気がリーンのとき 0.1 (V) 程度の出力電圧を発生する。

【0075】

図 10 は、図 3 のメインルーチンに対して割り込み実行される割り込みルーチンを示すフローチャートである。この割り込みルーチンは、パージ制御弁 22 に対して出力される駆動パルス信号のデューティ比 DPG を計算すべく予め定められた計算周期に対応して実行される。図 10 に示すように、ECU 31 は、割り込みルーチンを開始すると、まずステップ 210 においてパージ率を算出する。次いで、ECU 31 は、ステップ 212 においてパージ制御弁 22 の駆動処理を行う。

【0076】

以下に、図 10 のステップ 210、212 の各々で実行される処理内容を詳細に説明する。先ず、図 11 及び図 12 は、図 10 のステップ 210 で実行されるパージ率算出ルーチンを示すフローチャートである。

【0077】

図 11 に示すように、まず初めにステップ 220 において、前記デューティ比 DPG の計算時期かどうか判别される。デューティ比 DPG の計算時期でないときには、このままパーシ率算出ルーチンを終了する。これに対してデューティ比 DPG の計算時期であるときにはステップ 222 に進んでパーシ条件 1 が成立しているかどうか、例えばエンジン 8 の暖機が完了したかどうか判别される。パーシ条件 1 が成立していないときにはステップ 242 に進んで初期化処理が行われ、次いでステップ 244 ではデューティ比 DPG およびパーシ率 PGR が零とされ、パーシ率算出ルーチンを終了する。ステップ 222 においてパーシ条件 1 が成立しているときにはステップ 224 に進んでパーシ条件 2 が成立しているかどうか判别される。例えば、空燃比のフィードバック制御が行われており、且つ燃料の供給が行われている場合、パーシ条件 2 が成立していると判定される。パーシ条件 2 が成立していないときにはステップ 244 に進み、パーシ条件 2 が成立しているときにはステップ 226 に進む。

【0078】

ステップ 226 では全開パーシ流量 K P Q と吸入空気量 G_a との比である全開パーシ率 $P G 100$ が算出される。ここで全開パーシ流量 K P Q はパーシ制御弁 22 を全開にしたときのパーシ流量を表わしており、吸入空気量 G_a は吸気量センサ 27 (図 1) により検出される。全開パーシ率 $P G 100$ は、例えば機関負荷 Q/N (吸入空気量 G_a / 機関回転速度 $N E$) 及び機関回転速度 $N E$ の関数として、マップの形で予め ROM 33 内に記憶されている。

【0079】

機関負荷 Q/N が低くなるほど吸入空気量 G_a に対する全開パーシ流量 K P Q は大きくなり、全開パーシ率 $P G 100$ も機関負荷 Q/N が低くなるほど大きくなる。また機関回転速度 $N e$ が低くなるほど吸入空気量 G_a に対する全開パーシ流量 K P Q は大きくなるので、全開パーシ率 $P G 100$ は機関回転速度 $N e$ が低くなるほど大きくなる。

【0080】

次いでステップ 228 ではフィードバック補正係数 F A F が上限値 $K F A F 15$ ($= 1.15$) と下限値 $K F A F 85$ ($= 0.85$) との間にあるかどうか

判別される。 $KFAF15 > FAF > KFAF85$ のときには、即ち空燃比が理論空燃比にフィードバック制御されているときにはステップ 230 に進む。ステップ 230 ではパーセント率 PGR に一定値 $KPGR_u$ を加算することによって目標パーセント率 $tPGR$ ($\leftarrow PGR + KPGR_u$) が算出される。即ち、 $KFAF15 > FAF > KFAF85$ のときには目標パーセント率 $tPGR$ が徐々に増大される。なお、この目標パーセント率 $tPGR$ に対しては上限値 P (P は例えば 6%) が設定されており、従って目標パーセント率 $tPGR$ は上限値 P までしか上昇できない。次いで図 12 のステップ 234 に進む。

【0081】

一方、図 11 のステップ 228 において $FAF \geq KFAF15$ であるか又は $FAF \leq KFAF85$ であると判別されたときにはステップ 232 に進み、パーセント率 PGR から一定値 $KPGR_d$ を減算することによって目標パーセント率 $tPGR$ ($\leftarrow PGR - KPGR_d$) が算出される。即ち、燃料ペーパのパーセントに起因して空燃比を理論空燃比に維持しえないときには目標パーセント率 $tPGR$ が減少される。なお、目標パーセント率 $tPGR$ に対しては下限値 T ($T = 0\%$) が設定されている。次いで図 12 のステップ 234 に進む。

【0082】

図 12 に示すように、ステップ 234 では目標パーセント率 $tPGR$ を全開パーセント率 $PG100$ により除算することによって、パーセント制御弁 22 に対して出力される駆動パルス信号のデューティ比 DPG ($\leftarrow (tPGR / PG100) \cdot 100$) が算出される。従って、デューティ比 DPG 、即ちパーセント制御弁 22 の開弁量は全開パーセント率 $PG100$ に対する目標パーセント率 $tPGR$ の割合に応じて制御されることになる。その結果、目標パーセント率 $tPGR$ がどのようなパーセント率であったとしても機関の運転状態にかかわらず実際のパーセント率が目標パーセント率に維持される。

【0083】

例えば今、目標パーセント率 $tPGR$ が 2% であり、現在の運転状態における全開パーセント率 $PG100$ が 10% であったとすると駆動パルスのデューティ比 DPG は 20% となり、このときの実際のパーセント率は 2% となる。次いで運転状態が変

化し、変化後の運転状態における全開パーシ率 $P G 100$ が 5 % になったとすると駆動パルスのデューティ比 $D P G$ は 40 % となり、このときの実際のパーシ率は 2 % となる。即ち、目標パーシ率 $t P G R$ が 2 % であれば機関の運転状態にかかわらずに実際のパーシ率は 2 % となり、目標パーシ率 $t P G R$ が変化して 4 % になれば機関の運転状態にかかわらずに実際のパーシ率は 4 % に維持される。

【0084】

次いでステップ 236 では全開パーシ率 $P G 100$ にデューティ比 $D P G$ を乗算することによって理論パーシ率 $P G R$ ($\leftarrow P G 100 \cdot (D P G / 100)$) が算出される。即ち、前述したようにデューティ比 $D P G$ は ($t P G R / P G 100$) $\cdot 100$ で表わされるので、目標パーシ率 $t P G R$ が全開パーシ率 $P G 100$ よりも大きくなると、算出されるデューティ比 $D P G$ は 100 % より大きくなる。しかしながらデューティ比 $D P G$ は実際には 100 % より大きくなり、算出されるデューティ比 $D P G$ が 100 % より大きい場合にはデューティ比 $D P G$ は 100 % とされる。そのため、理論パーシ率 $P G R$ は目標パーシ率 $t P G R$ よりも小さくなる場合がある。この理論パーシ率 $P G R$ が、上記した図 8 のステップ 182 での更新量補正係数 $K R P G$ の算出、図 8 のステップ 184 での更新量 $t F G$ の算出、図 9 のステップ 204 でのパーシ A/F 補正係数 $F P G$ の算出、及び図 11 のステップ 230, 232 での目標パーシ率 $t P G R$ の算出等に用いられる。

【0085】

次いでステップ 238 ではデューティ比 $D P G$ が $D P G O$ とされ、パーシ率 $P G R$ が $P G R O$ とされる。次いでステップ 240 ではパーシが開始されてからの時間を表しているパーシ実行時間カウント値 $C P G R$ が 1 だけインクリメントされ、パーシ率算出ルーチンを終了する。

【0086】

図 13 は、図 10 のステップ 212 で実行されるパーシ制御弁 22 の駆動処理ルーチンを示すフローチャートである。図 13 に示すように、まず初めにステップ 250 においてパーシ制御弁 22 に出力される駆動パルス信号 $Y E V P$ の立上り時期であるかどうか判別される。駆動パルス信号 $Y E V P$ の立上り時期であ

るときにはステップ 252 に進んでデューティ比 DPG が零であるかどうかを判別される。 $DPG = 0$ のときにはステップ 260 に進んで駆動パルス信号 YEV がオフとされる。これに対して $DPG \neq 0$ ではないときにはステップ 254 に進んで駆動パルス信号 YEV がオンにされる。次いでステップ 256 では現在の時刻 $TIMER$ にデューティ比 DPG を加算することによって駆動パルス信号 YEV のオフ時刻 $TDPG$ ($\leftarrow DPG + TIMER$) が算出され、パージ制御弁駆動処理ルーチンを終了する。

【0087】

一方、ステップ 250 において駆動パルス信号 YEV の立上り時期ではないと判別されたときにはステップ 258 に進んで現在の時刻 $TIMER$ が駆動パルス信号 YEV のオフ時刻 $TDPG$ であるかどうかを判別される。 $TDPG = TIMER$ になるとステップ 260 に進んで駆動パルス信号 YEV がオフとされてパージ制御弁駆動処理ルーチンを終了し、一方、 $TDPG \neq TIMER$ ではないときは、そのままパージ制御弁駆動処理ルーチンを終了する。

【0088】

以上説明した本実施の形態によれば、以下のような効果を得ることができる。

- ・ 本実施形態では、燃料ベーパーのパージを実行しているときに、空燃比が目標空燃比からずれたときには、ベーパー濃度学習値を更新するが、この際、エンジン 8 の負荷率 $KLOAD$ が大きいときには大きいときには負荷が小さいときに比較してベーパー濃度学習値 $FGPG$ の更新量 tFG を小さくするようにしている。そのため、エンジン 8 の負荷率 $KLOAD$ が大きい、すなわち吸気負圧が小さい場合のパージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、エンジン 8 の空燃比制御の精度が向上する。

【0089】

- ・ また、本実施形態では、パージ制御弁 22 によってパージされるパージ流量のパージ率 PGR が小さいときにはパージ率 PGR が大きいときに比較してベーパー濃度学習値 $FGPG$ の更新量 tFG を小さくするようにしている。パージ流量が少ないパージ率 PGR が小さい状態では吸気通路 10 に作用する吸気負圧も小さく、パージ制御弁 22 における圧損のばらつきが大きくなり、パージ流量の

ばらつきが大きくなる。この点に関して、本実施形態によれば、パーシ率が小さく吸気負圧が小さい場合のパーシ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、エンジン 8 の空燃比制御の精度が向上する。

【0090】

なお、実施の形態は上記に限定されるものではなく、次のように変更してもよい。

- ・ 上記実施形態において、負荷率 K L O A D に代えて、吸入空気量をエンジン 8 の負荷として採用し、吸入空気量及びパーシ率 P G R に基づいて更新量補正係数 K R P G を算出するようにしてもよい。エンジン 8 に吸入される吸入空気量が多い状態では吸気通路 10 に発生する吸気負圧は小さく、吸入空気量が少ない状態では吸気通路 10 に発生する吸気負圧は大きくなるためである。

【0091】

- ・ 上記実施形態において、負荷率 K L O A D に代えて、吸気圧力をエンジン 8 の負荷として採用し、吸気圧力及びパーシ率 P G R に基づいて更新量補正係数 K R P G を算出するようにしてもよい。エンジン 8 の吸気圧力が大きい状態では吸気通路 10 に発生する吸気負圧は小さく、吸気圧力が小さい状態では吸気通路 10 に発生する吸気負圧は大きくなるためである。この場合、吸気通路 10 に吸気圧力を検出する吸気圧センサを設け、その検出圧力を吸気圧力として用いればよい。

【0092】

- ・ 上記実施形態では、更新量補正係数 K R P G をパーシ率 P G R 及び負荷率 K L O A D によるマップに基づいて算出するようにしたが、更新量補正係数 K R P G を負荷率 K L O A D のみに基づいて算出するようにしてもよい。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 実施の形態の内燃機関システムを示す概略構成図。

【図 2】 図 1 のエンジンシステムにおける電子制御装置（E C U）の電氣的構成を示すブロック図。

【図 3】 図 2 の E C U による内燃機関の空燃比制御方法のメインルーチンを示すフローチャート。

【図 4】 図 3 のフィードバック補正係数 F A F 算出ルーチンを示すフローチャート。

【図 5】 空燃比及び空燃比フィードバック補正係数の変化態様を示すタイムチャート。

【図 6】 図 3 の空燃比学習ルーチンを示すフローチャート。

【図 7】 ベーパ濃度学習の考え方を説明するグラフ。

【図 8】 図 3 のベーパ濃度学習ルーチンを示すフローチャート。

【図 9】 図 3 の燃料噴射時間算出ルーチンを示すフローチャート。

【図 10】 図 2 の E C U による割り込みルーチンを示すフローチャート。

【図 11】 図 10 のパージ率算出ルーチンを示すフローチャート。

【図 12】 図 10 のパージ率算出ルーチンを示すフローチャート。

【図 13】 図 10 のパージ制御弁駆動処理ルーチンを示すフローチャート。

【図 14】 パージ率及び負荷率による更新量補正係数のマップ。

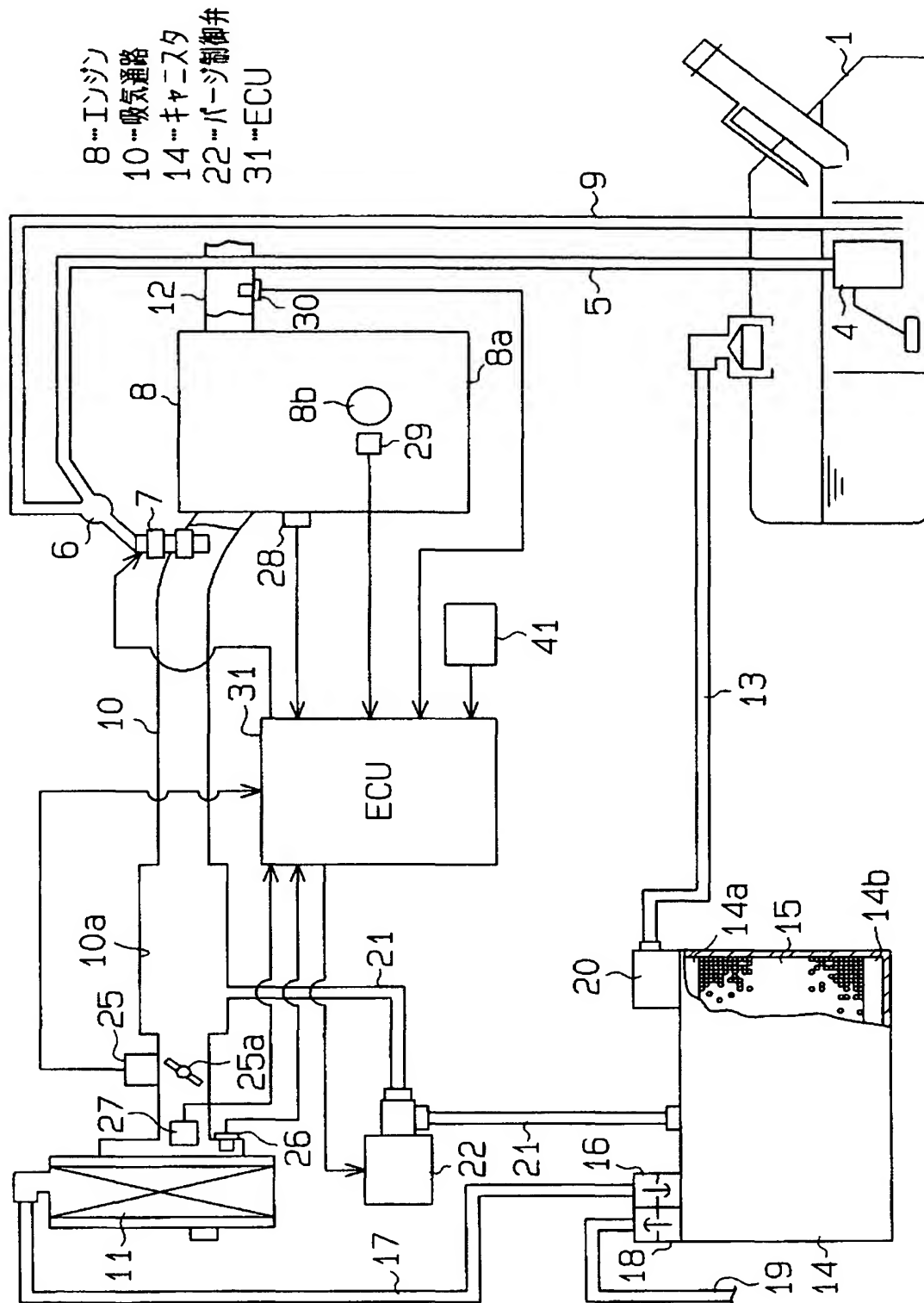
【図 15】 内燃機関の負荷率とパージ制御弁の全開パージ流量との関係を示すグラフ。

【符号の説明】

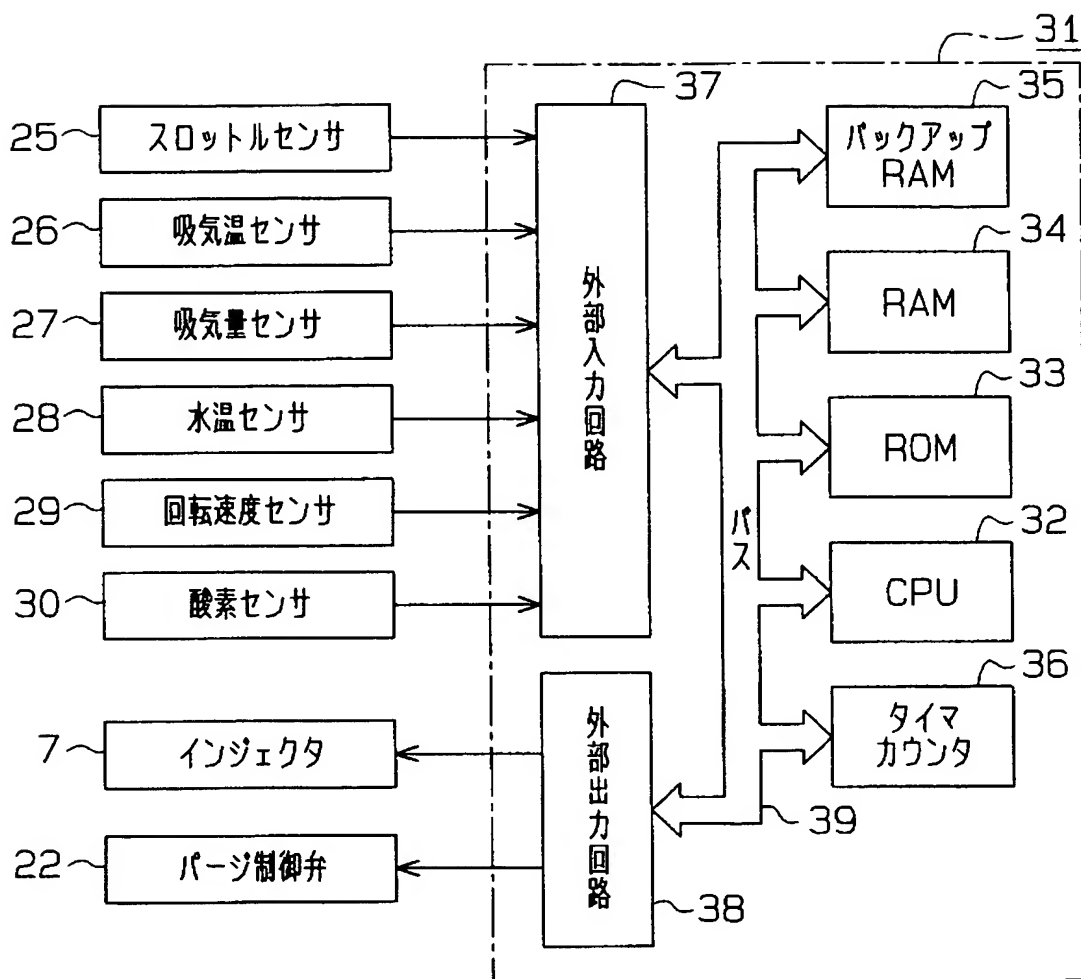
1…燃料タンク、8…エンジン（内燃機関）、10…吸気通路、14…キャニスタ、22…パージ手段としてのパージ制御弁、31…ベーパ濃度学習手段及び噴射量設定手段としての E C U、F G P G…ベーパ濃度学習値、G a…吸入空気量、K P Q…パージ流量、P G R…パージ率、t F G…更新量。

【書類名】 図面

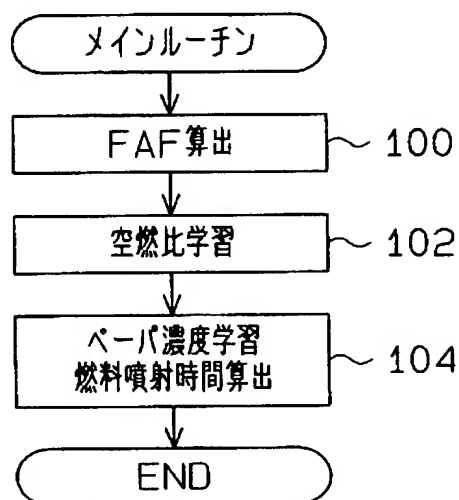
【図 1】



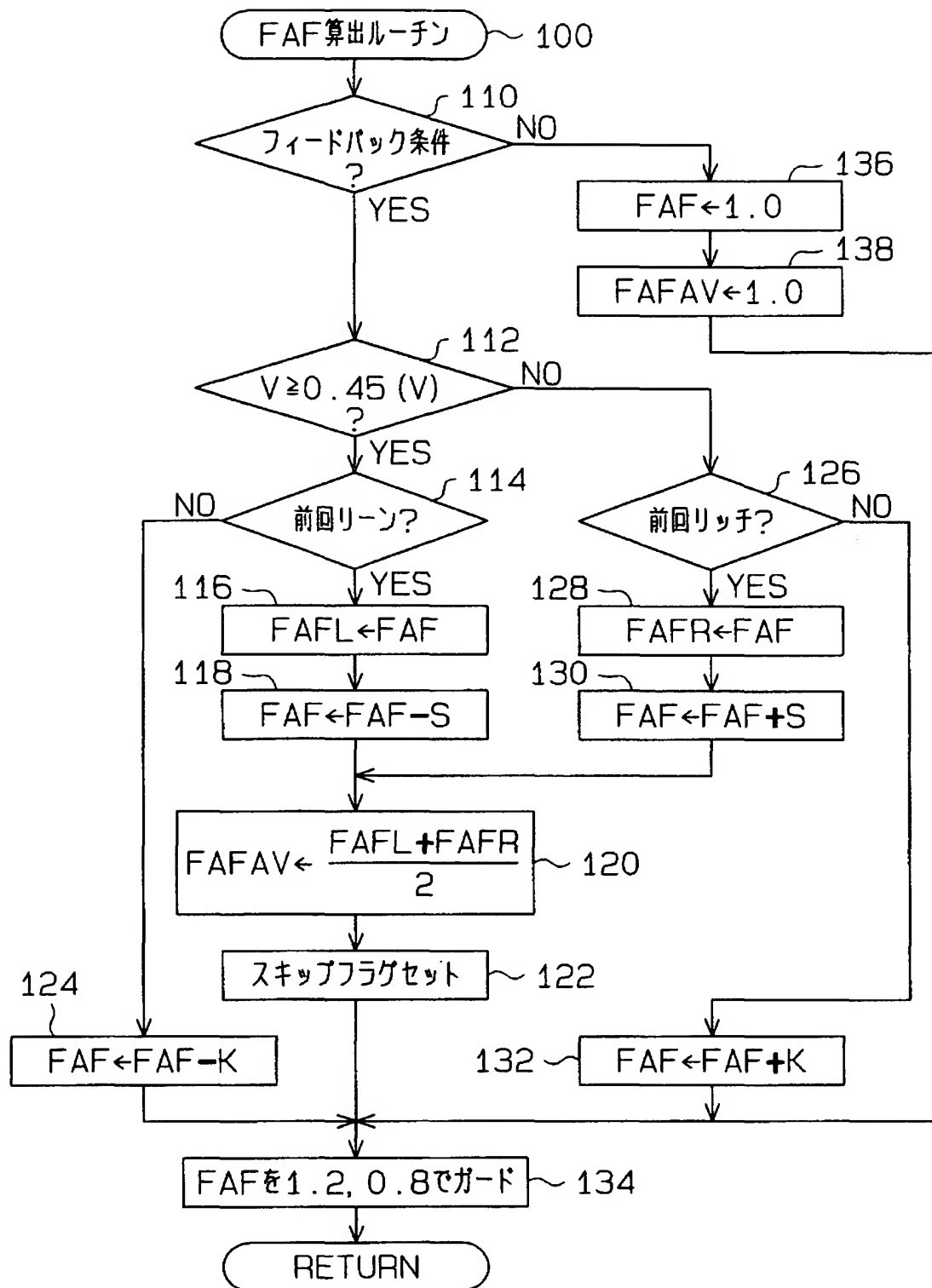
【図 2】



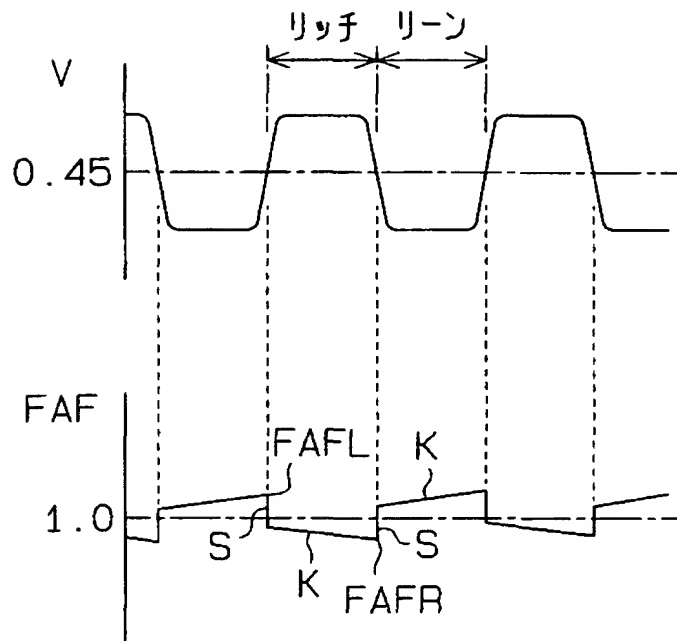
【図 3】



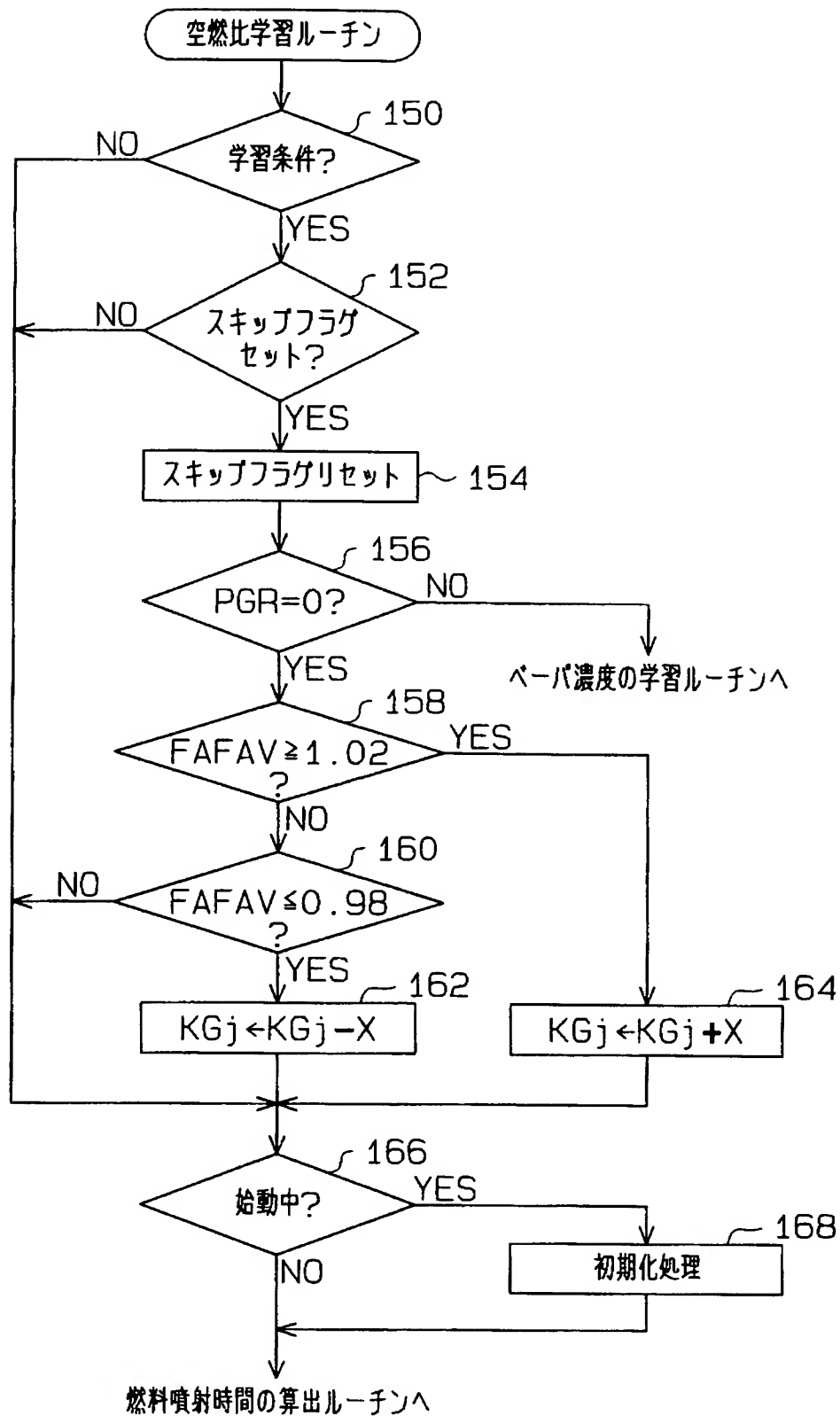
【図 4】



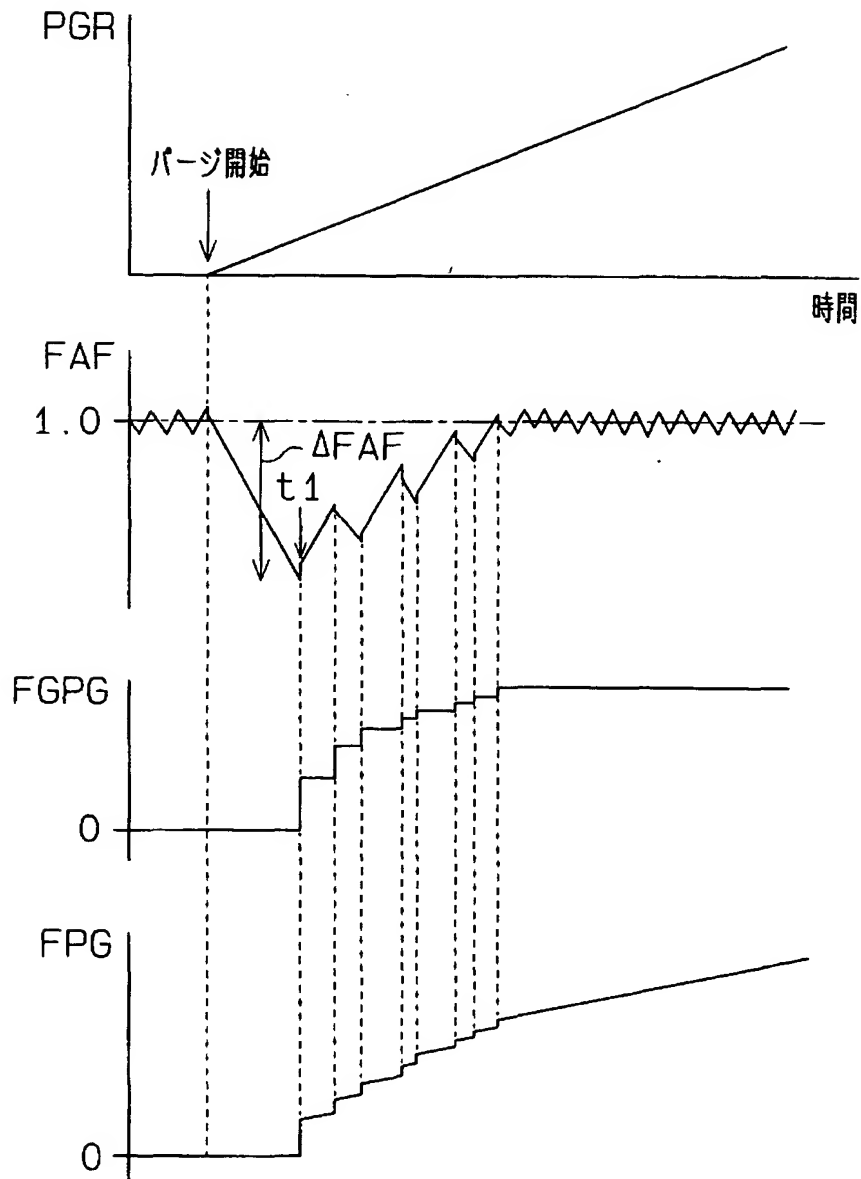
【図 5】



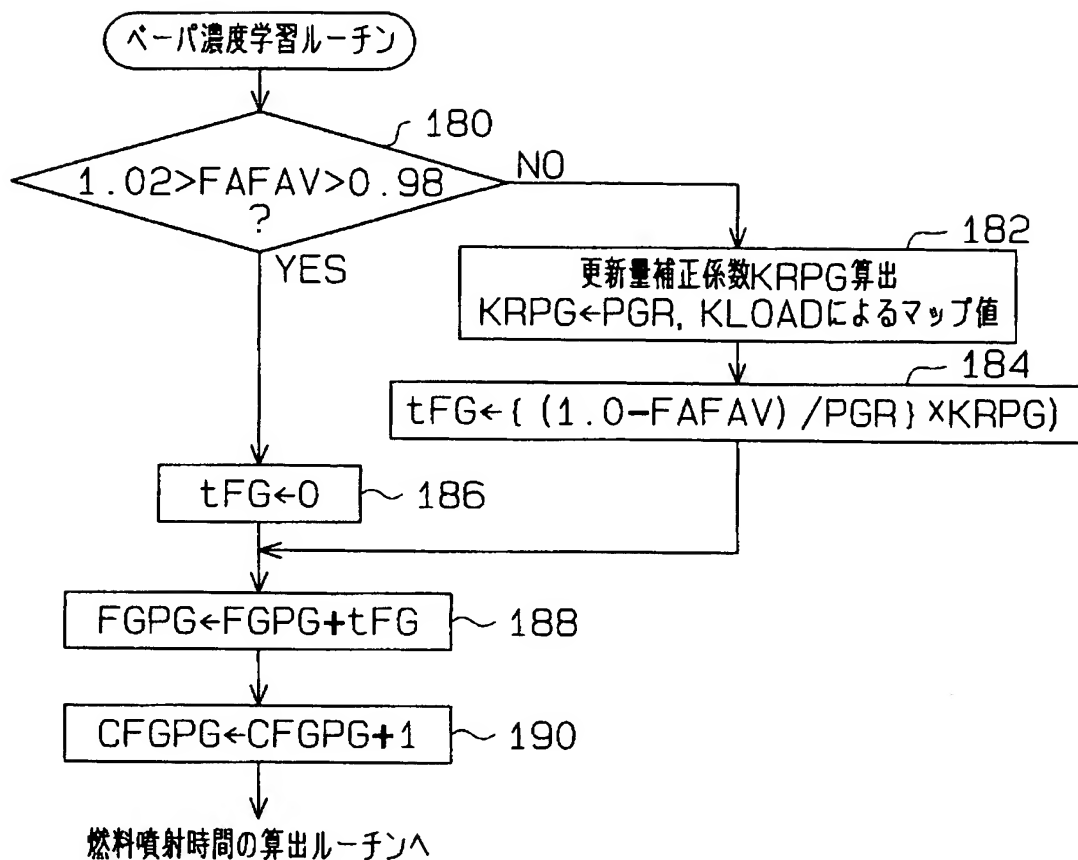
【図 6】



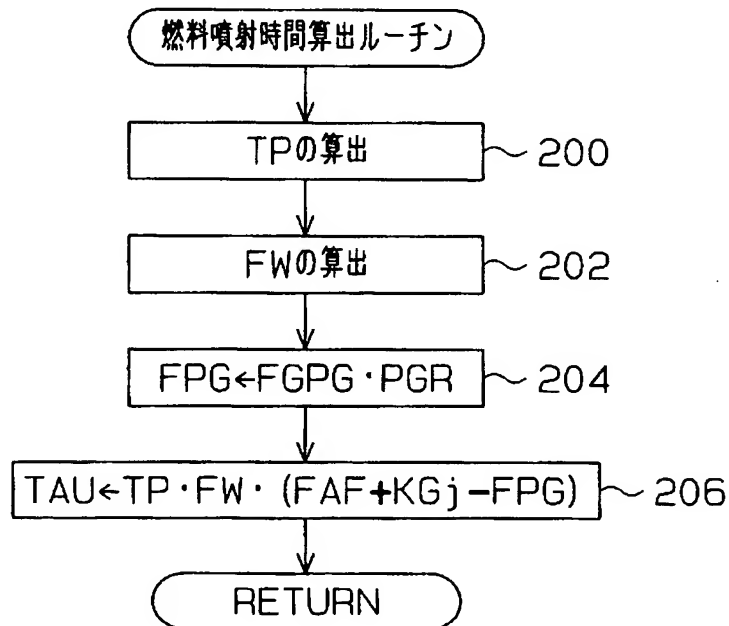
【図 7】



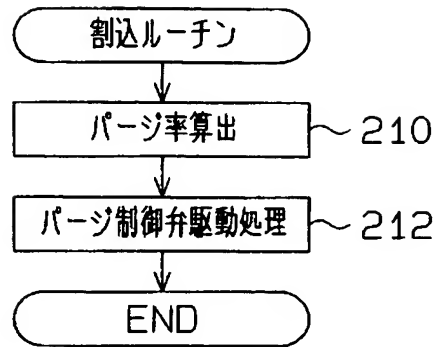
【図 8】



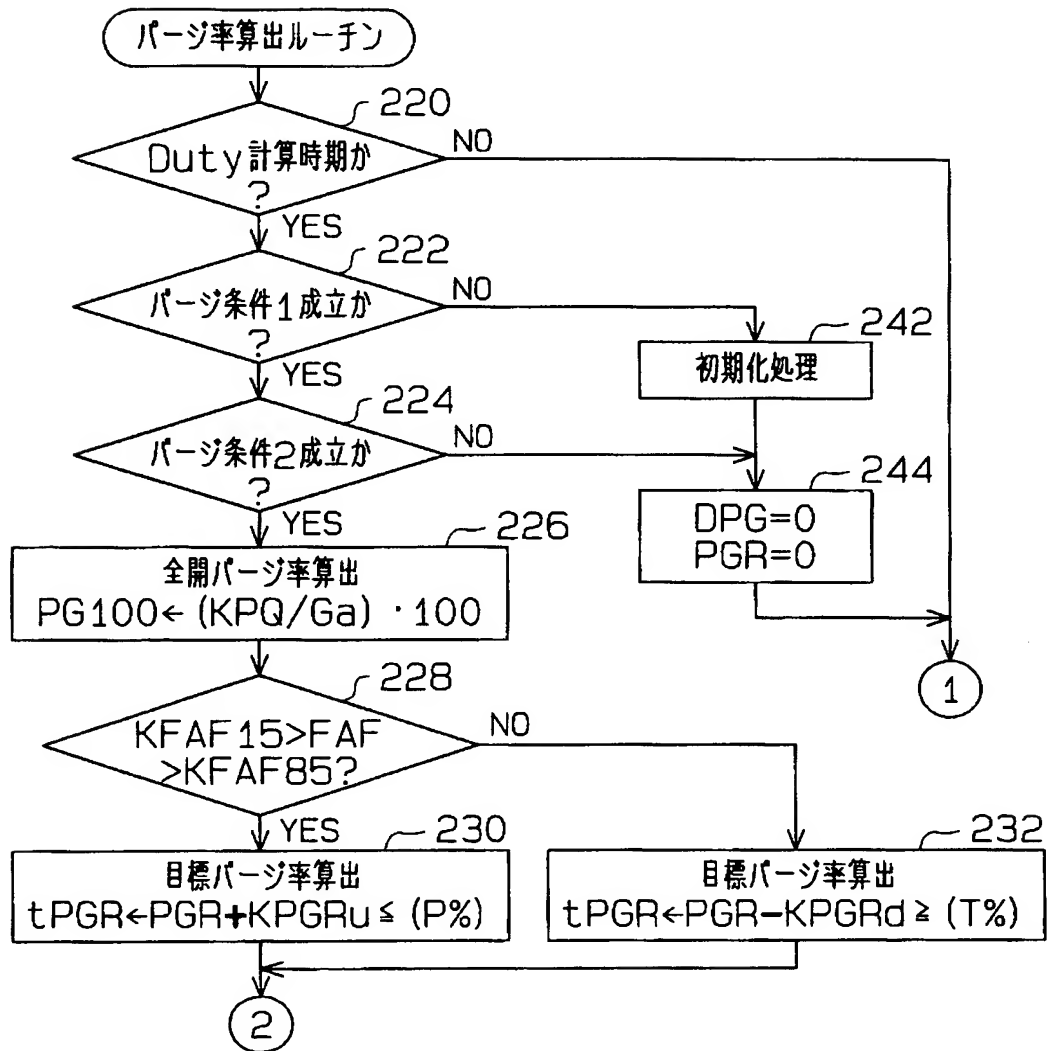
【図 9】



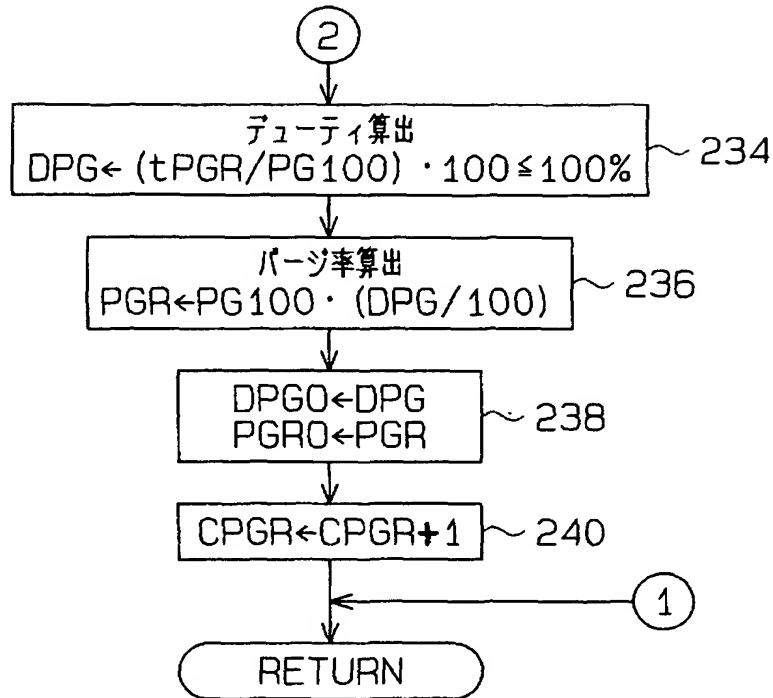
【図 10】



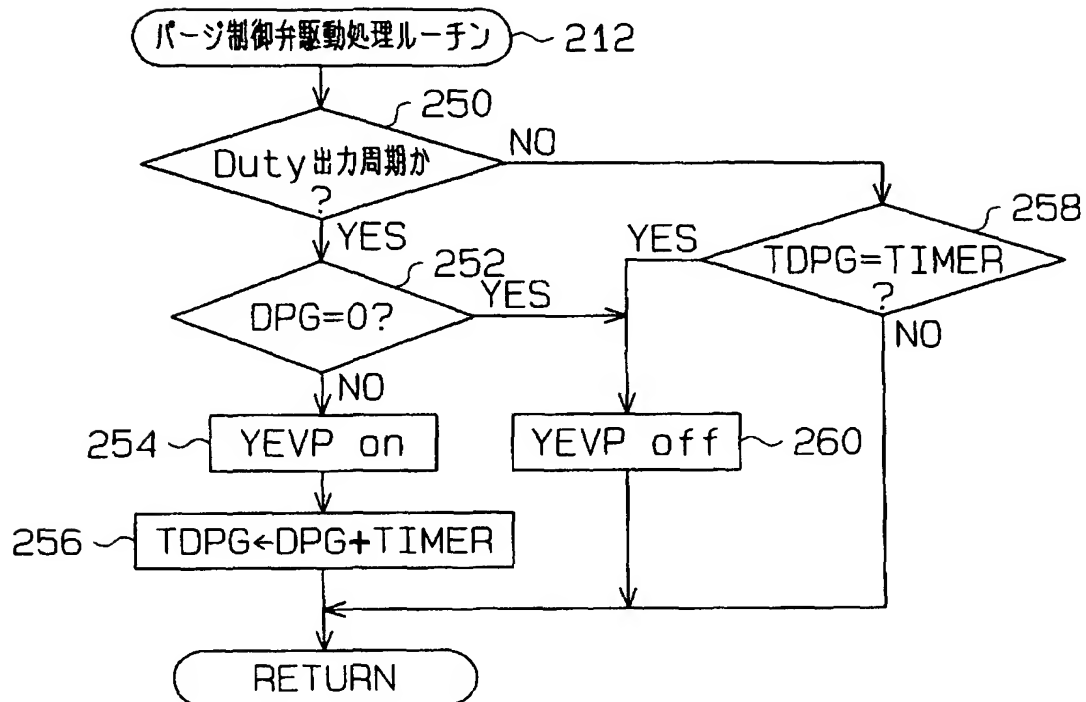
【図 11】



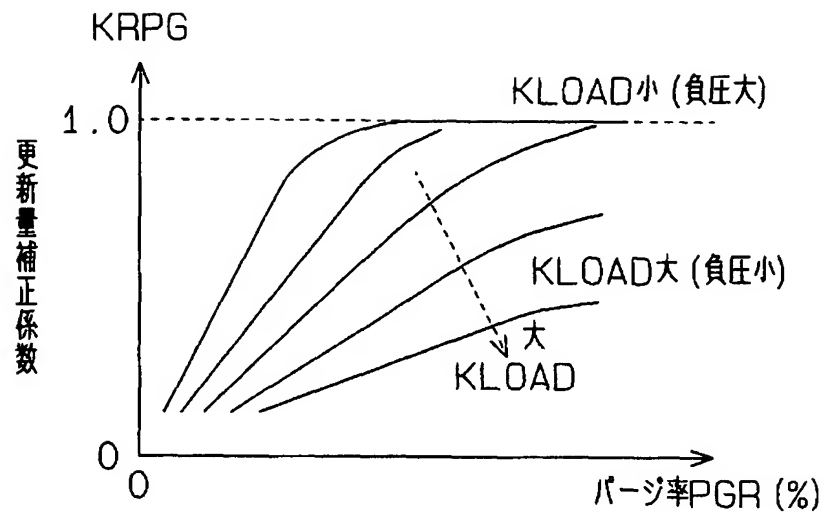
【図 12】



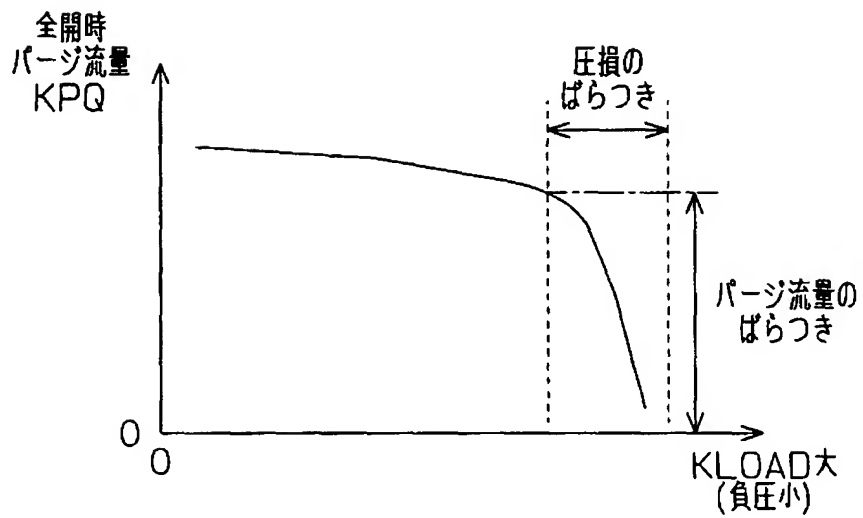
【図 13】



【図 14】



【図 15】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 内燃機関の負荷の大きさによるパージ流量のばらつきを考慮したベーパー濃度学習を行うことができ、空燃比制御の精度を向上させる。

【解決手段】 ベーパー濃度学習処理が開始されると、まずステップ180でフィードバック補正係数FAFの平均値FAFAVが所定範囲内にあるかどうか判别される。 $1.02 > \text{FAFAV} > 0.98$ であるときにはステップ186で更新量tFGが零とされる。一方、ステップ180において $\text{FAFAV} \geq 1.02$ であるか又は $\text{FAFAV} \leq 0.98$ であるときには、ステップ182でパージ率PGR及び負荷率KLOADによるマップに基づいて更新量補正係数KRPGが算出される。次にステップ184で更新量補正係数KRPGを用いてベーパー濃度値の更新量tFGが $\{(1 - \text{FAFAV}) / \text{PGR}\} \times \text{KRPG}$ に基づき算出される。ステップ188ではベーパー濃度値FGPGに更新量tFGが加算される。

【選択図】 図8

特願 2 0 0 3 - 2 0 0 7 3 3

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 3 2 0 7]

1 . 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 2 7 日

[変更理由]

新規登録

住 所

愛知県豊田市トヨタ町 1 番地

氏 名

トヨタ自動車株式会社